優秀賞

銀賞

『二〇〇円のおばけ』

『二〇〇円のおばけ』

広島県　福山暁の星女子高等学校二年　廣見結菜

「こうちゃーん、今日何して遊ぶ？」
「そうだなー」
ミンミンミンとセミの鳴き声がうるさい。斜め右から差し込んで来る太陽がまぶしくておれは右手をかざした。ランドセルのせいで汗がシャツにへばりついている。そんなことを考え、二人の幼なじみと話しながら、おれは石ころを蹴っていた。
「オレはかくれんぼだな！」
健太はそう言うや否や、おれの石ころを勝手に奪って蹴った。石ころが前方へ飛ぶ。
「えー、駄菓子屋さん行こうよぉ」
理沙が口を尖らせながら
「こうちゃんも駄菓子買いたいよねー」
と手に持っているシューズ袋をぶんぶん振り回す。おれに当たりそうで怖いから止めてほしい。
「じゃあかくれんぼしてから駄菓子屋に行こうぜ！　それで決まりな！」
おれの言葉に二人が「おおー！」と目を輝かせる。健太から奪い返した石ころは、勢いをつけて蹴った拍子にポンッという心地良い音をたてて水たまりの中に落ちた。二人の「あーあ」という落胆の声を背後に聞きながら

空を仰いだ。
小学四年生の夏休みが今、始まる。水たまりの端には小さく虹が映っていた。
いつものように、かくれんぼの舞台は路地が張り巡らされた商店街。毎日、おれたちはここで逃走者、そしてハンターと化す。
「じゃあ理沙が鬼……じゃなくてハンターな！　よしっこうすけ、逃げるぞー！」
「了解！　おたがいの無事を祈る！」
ビシッと敬礼をしてにやりと二人で笑ったのち、おれは健太が走って行くのとは逆の方向に慌てて逃げる。細い路地を抜けて、理沙が秒数をカウントする声が聞こえない所までやってきた。背後に誰も接近していないことを確認して、再び前を向くと
「……なんか、ぞわぞわするなあ……」
空気が明らかに変わっていた。数秒前にそこを歩いていたおばさんの姿も見えないし、さっきまで鳴いていたカラスの声一つさえ聞こえない。ただ、しーんと静まり返っている。
「……こんなお店なんてあったっけ？」
目の前に小さなお店がたたずんでいる。「幸福堂」と茶色の木の板に達筆で書かれていて、屋根のすぐ下に掲げられているが、こんな店を見たことなんて一度もない。引き戸はほんの少し開いていて、そのすき間の奥からはオレンジ色の光があふれている。何かにおいでおいでと手招きされているかのように、おれは不思議と店の中に引き込まれていった。
「こんにちはー……」
おそるおそる中に入ってみると、小さくて狭い室内にはところ狭しといろんな品物が置いてあった。それらに

興味を引かれて、おれは奥のイスにちょこんと座るおじいさんに気付かなかった。
「やあ、こんにちは」
「うわぁ！　び、びっくりしたぁ」
　おじいさんは白くてふわふわ、もじゃもじゃしたひげを伸ばしていて、なんだかアニメやマンガによく出てくるサンタクロースに似ていた。ぽっちゃりじゃなくて痩せているけれど。そんなおじいさんは丸めがねを外しておれの顔をじっと見つめたあと、にっこり笑って独り言のように呟いた。
「お客さんに会うのは久しぶりだなあ」
「そんなに長い間誰も来てなかったの？」
「そうだよ。このお店を見つけること自体、奇跡と偶然が重ならなきゃ難しいんだよ。あとは運命のめぐりあわせ」
「……ふーん」
　このおじいさんの言ってること、よく分かんないなあ。レアカードを引くこと以上にすごいことなのか？
　おれの心を読んだように、おじいさんが口を開いた。無邪気な表情で。
「ホログラム加工の付いたレアカードを一度に十枚引くぐらいすごいことだよ」
「え!!　すげえ!!」
「だろう？　ここではそんなレアカード並みにめったにない、不思議な宝物を売っているんだよ」
　おれは店内を見回した。小さな丸い玉から大きな剣、古書などが積まれたり棚に並べられていたり、中には床に置かれたりしている。おじいさんが一つずつ手に取って見せる。
「これはドラゴンの目玉。この剣はユニコーンの角で作られているんだよ。世界を見渡せる千里眼の双眼鏡もあるし……」

　めちゃくちゃかっこいいなー！　この中のものを一つ買って、健太と理沙に見せたらどうなるだろう。学校に持っていったらどうなるだろう。あ、でも、明日から夏休みだからみんなには見せられないや。もしこの双眼鏡を持ってたら、二人とのかくれんぼは永遠におれの勝ちだなぁ。うらやましがる二人が少し可哀相だから、三人の秘密基地に隠してみんなで使おう。
　そんな想像を風船みたいにふくらませていると、突然おじいさんの「危ない！」という叫びが聞こえた。
「え？　……うわあああ!!」
　ふと前を向くと天井に届くぐらいに山積みされたたくさんの本がこちらに向かって倒れてくるところだった。逃げようにも足が震えてずるずるとその場に座り込み、頭を抱えた。
　その瞬間、視界の端にかいま見えたのは、立ち上がったおじいさんがユニコーンの角で作られたという杖を倒れてくる本に振りかざす姿だった。
「○△☆□!!」
　おじいさんが何語か分からない言葉を呟いた刹那、ビビビッと部屋の中なのに稲妻が走った。青白い閃光が部屋の空気を止めた。するとスローモーションで迫っていた一冊一冊の本が空中停止してしまった。
「すげえ……もしかしてこれ魔法？」
　目を輝かせて尋ねるおれにおじさんは大きく「うん」と首を縦に振った。
　ふと、部屋の隅に目が行った。先程の本の山で見られなかった場所だ。そこにはホコリをかぶった小さくて銀色の鳥かごがあった。
「おじいさん、これなに？」
　おじいさんは空中で止まったままの本を元通りにするのに一苦労していたので、その隙に物陰からそれを引っ

張り出してみた。やっぱり、その辺のペットショップに売っている鳥かごと変わらない。
本を積み終えたおじいさんが目を真ん丸くしてかごを指差した。
「……そこにあったのか」
何の変哲もない、銀色の鳥かご。ランドセルにすっぽり入るぐらいの大きさだ。鳥かごに顔を近付けてのぞいても、何も見えない。
「この中にはおばけが入ってるよ」
おじいさんがにっこり笑う。
「でもさあ、何も見えないよ？」
「そりゃあ部屋は電気が点いているし、なにより、まだ夜じゃないからね」
「そっかー……それで、双眼鏡とかこの杖とかって何円？　おれにも買えるかなあ～」
商品の近くには白い値札が置いてあって、おれはまず杖の値段を見た……けど……。
「〇の数が!!　おかしいこれ!!　一、二、……七個もあるんだけど！」
「おじさんが生死をかけて取りに入ったり、『あっちの世界』の人と交渉してなんとか手に入れたものが多いからなあ～……」
そっか、とがっくり肩を落としてうつむくと、視界にさっきの鳥かごが映った。
「じゃあおばけも……絶対高いよね？」
そう呟きながらかごをひっくり返すと、白い値札のシールが貼ってあった。そこにあったのはなんと「二〇〇円」の文字。う、うそだろ？
「おじいさん、おれ、おばけ買う！」

「どれどれ、あ、ほんとだ、二〇〇円って書いてあるね、うん」
「でもさっきおじいさん、『そこにあったのか』って言ってたじゃん。大事なものなんじゃないの？」
「たしかに……探してはいたけれど。でもこのタイミングで出て来たんだ。これは君とおばけの運命なんだよ、きっと。だからおじさんも君にこれを売るよ」
おれはそわそわと跳びはねたい気持ちを抑えつけてランドセルのポケットから黄色のがま口財布を取り出した。中には二〇〇円が入っていた。それらを手の平に出したとき、「あ」と小さな声が漏れ出た。この二〇〇円で今日駄菓子屋でお菓子を買おうと思ってたんだった。母さんは健太のところのお母さんと違っておこづかいもくれないし、なんなら肩もみと皿洗いと洗濯物たたみをセットで手伝ったら五〇円、っていうケチな人だ。それで一週間以上前から今日のために貯めてきて……。
でも、とおれは自分に言い聞かせた。おばけとお菓子、選ぶなら……おばけでしょ！　それも、明日もこの店と出会える可能性は低い。おれは意を決しておじいさんのしわくちゃな手の平に百円玉を二枚乗せた。
「これでこのおばけは君のものだよ」
「やった！」
おれのおばけ。今日からおばけも友達。おばけを友達にした小学生って、世界でおれ一人じゃないのかなぁ。やったぜ！
気分ルンルンでおじいさんに「ありがとう」と一言告げて店を出ようとしたとき、「待って！」と制止をかけられた。
「おばけのごはんは、一食分が幸せひとつ。分かったかい？」
「分かった！」

そうおれは店主のおじいさんの言葉になんの疑問も持たず、銀色に光る鳥かごをぶらさげて幸福堂をあとにした。

店の外に一歩踏み出すと、ザァァッと大きく強い風が吹いて、砂が目に入らないよう両眼を固く閉じた。風の音が止んで、ゆっくり目を開いて店を振り返ると、

「あれ……何も無い」

そこにはただ狭い路地が続いているだけだった。ぼーっと突っ立って何分かすると、

「こうちゃん見っけ!」

という聞きなれた声が聞こえた。理沙だ。

「隠れもしないで何やってんの? まだ始まって一分しか経ってないのに」

理沙がおかしそうにくくくっと笑う。

「おじいさん……幸福堂……杖は……?」

「何訳分かんないことを言ってんの? あ、健ちゃん見っけ!」

理沙に連れられてきた健太はおれに尋ねる。

「その鳥かご、持ってたっけ?」

店は消えたのに、鳥かごは残っている。その現実に目を瞬いて、事の有様を二人に説明した。……が。

「えー、それこうちゃん、ハクチュームってやつじゃない?」

「ハクチューム? なんだそれ?」

「白昼夢。真っ昼間に見る夢だってー」

「その杖の話もゲンカクってやつだよ。で、こうすけは鳥かごをどっかから拾ってきたと」

健太も首をひねりながらそう言う。夢かあ……とおれは悲しくなってしまった。

「まあまあがっくりしなさんなって。お菓子ちょっと分けてやるよー」

理沙がくれたラムネ十粒と健太がくれたうまい棒チーズ味を食べたら、なんだか鼻の奥がツンとした。友達って優しいなあ。

「あーあ。二〇〇円無駄にしちゃったなあ」

自分の部屋に上がって、電気も点けずベッドに寝っ転がる。今朝カーテンを開け忘れたから、本当に真っ暗闇だ。目をつぶった時、何かがいきなりおれにぶつかった。

「うわあ!?」

な、なんだこれー! 部屋の中を黒いおれのランドセルがとび回っている。というか暴れている。慌ててつかまえて、はたと気付いた。そうか、この中に鳥かごを入れたんだ。そっと開くと、かごの中に白い小さな発光体が浮かんでいる。うわぁ、本当におばけだ! おばけは驚いて声が出ないおれを脇目にかごのすき間からスッと出て、おれの目の前にふわふわ浮かんだ。

「おなかすいた! すきましたよ!!」

ご飯って……何あげれば良いんだっけ。……幸せって……これでもいいのかな。とろけるクリームプリン。これ食べると幸せになるから。

おずおずと差し出すとおばけはガツガツと食った。大きな口を開けて一飲みにした。体の色がカラメルとプリンと生クリームの色の三層になっていて、声を出して笑った。

「宏介ー、うるさいよー」

「ご、ごめんマンガが面白くて……」

母さんの言葉に嘘で返して、目の前で宙返りをするおばけを見てもう一度笑った。いたんだ。やっぱりおばけはいたんだ！

「仲良くしような、おばけ！」

「もちろん！」

おれとおばけは見つめあって、いたずらしてきたみたいに、にやっと笑った。

それから一週間、おばけとはいろんな事をした。いつもおれの部屋で夜遊んでいたけど、母さんと父さんが仕事で遅い日はリビングで遊んだ。童謡の通りに試してみようと思って冷凍庫に入れてみたけどカチカチにはならなくて、おばけは「冷たいので過ごしやすいですよ」と言っただけだった。あとご飯である「幸せ」としてアイスを一本食べられた。体がソーダの水色に透けていて、お腹を抱えて笑うとおばけも嬉しそうにリビングをぐるぐると飛び回った。

「宏介、遼の病院に行こっか」

ある日の朝、母さんがそうめんをすすりながらそう提案した。遼は今年小学一年生なんだけど、重い心臓の病気で学校に行けない、おれの大切な弟だ。そうだ、遼におばけを見せてあげよう。きっと喜んでくれるはず。

病院に着いて、朝から夕方までは遼の病室で夏休みの宿題をやりながら遼に学校で最近起きた出来事などを話した。例えば、健太と理沙の教科書がいれかわってお互いのランドセルに入っていたこと。そんな事を話すと遼は手を叩いて笑った。そして絶対にこう言う。

「ぼくもともだちがほしいなあ……!!」

何度目かの笑い話が終わって、遼はまた何度目かの言葉を発した。その瞬間、病室の窓から見える夕陽が地平線に沈んで夜になった。母さんは先生に呼ばれて帰って来ない。今がチャンスだ。おれはかばんにかくしてあった小さな鳥かごを遼の目の前の机に置いた。

「にーちゃん、なにこれ？」

遼はかごをのぞき込んだり振ったりしている。そのすきにおれはカーテンを閉めて、病室をまっ暗にした。おばけが浮かび上がる。

「わぁ!!」

遼が息を呑んで、両手を器の形にした。そこにおばけは乗る。昨晩そうめんを食べたので、体の色はおばけらしく白い。

「これな、おばけ！」

そしておじいさんや空中停止した本の話などをすると遼は食い付いて聞いていた。特に食べ物で体色が変化する話には興味津々で「ぼくも食べさせてみたい！」と言い出した。

「これ、今日のお昼の病院食のすいか！　看護師さんにはナイショであとで食べようって取っておいたんだ！」

遼はいたずらっ子の表情を浮かべて備え付きの小さな冷蔵庫からすいか一切れを取り出した。おばけは皮も種も無視して飲み込んだので、赤と緑と黒のグラデーションがきれいな体色になった。遼はそれを見て涙が出るほど笑っていた。やっぱりおれたちは兄弟で、ツボが入るポイントも同じなんだなあ。遼のこんな楽しそうな笑顔、久しぶりだ。おれはそれを見てあることを決意した。

「遼、おばけと仲良くできるか？」

「できるよ！　初めての友達だもん！」

「おばけ、遼と一緒にいてあげてほしい」

「もちろんですよ。遼も宏介も話してると楽しいですからね！」

おれは二人がニコニコ笑っているのを見て幸せな気分になった。そして病室を出た。
数日が経った。おれは毎日いつもの三人で遊んでいる。だけど、最近は夜一人ぼっちが多い。両親は頻繁に遼の病室に呼び出されるようになった。どうやら遼の病態が悪くなってきたらしい。今日は母さんが血相を変えて仕事の途中なのに家に帰ってきた。そのままおれを車に乗せて病院へ。
言葉を失った。数日ぶりに見る遼は変な機械に沢山の管でつながれ、青い顔で横たわっていた。泣き出しそうな顔をした母さんはそのまま先生に連れて行かれた。
「遼」と呼びかけるとおれの弟はゆっくり目を開けた。うつろな目だった。誰が見ても分かる、遼は死にかけている。遼の頬に伸ばした右手の指が震えていた。
「もしかして、何か……したのか?」
遼は首を小さく横に振って目をつぶった。
「おばけの……幸せ……ぼくね、あんまり病院のご飯好きじゃなくて、だからおばけも『幸せ』な食べ物と感じないそうで、食べ物に困ってたんだ。ぼくの幸せは、点滴が一つ取れたとか、兄ちゃんが来たとか……。だからね、ぼくその幸せな気持ちをおばけにもあげたんだ。ぼくだけが一人占めってずるいでしょ?」
おれが言葉を失って、遼がかすかに笑った時、とっぷりと日が暮れた。目の前に浮かぶおばけの体は淡い虹色で、それでいてとんでもなく悲しげな表情をしていた。
「幸せって……幸せって! そういうことだったのかよ、なんで、なんで遼の幸せは減って減って今もうすぐ尽きそうなのに……! おれは毎日ふつうに暮らしてるだけなのに、好きなものが食べられて、毎日友達と遊べて……幸せが増えていく。遼の方が毎日を大事に、そう大切に……生きているのに」
病気や、幸せを食べないと生きられないおばけへのどうしようもない腹立たしさや悲しみで視界がぼやけた。

真っ暗な病室で遼は荒い呼吸をしている。その時凛とした声が響く。
「おばけを食べてよ、遼。おばけ、遼と宏介に沢山幸せもらって、幸せで満たされてるの。おばけは宏介達より前の持ち主皆に幸せをもらって今日まで百年くらいひっそり生きてます。だからここでおばけを食べたら、遼に百年分の幸せが引き継がれると思うんだよね」
淡い虹色の体がふわふわと漂う。
「おれの幸せ……おばけと話せたこと」
ぴくり。おばけが大口を開けた。
「今日分の幸せ、宏介、ありがとう」
虹色はさらに輝きを増した。おばけの体が荒い呼吸を繰り返す遼の口元へ近付いていく。
「おばけ、嘘だろ、本当にっ」
「宏介、遼、こうやって命は、幸せは、繋がっていくんだよ。食べることは、生きるってことなんだよ」
「待っ」
「ありがとう、楽しかった!」
最後に笑ったおばけは遼の口元に消えた。冷たい病室の床に座り込んだ瞬間、遼の荒い呼吸は止んだ。先生達が慌てて入って来た。
それから何度目かの夏がやって来て、兄弟でおそろいの黒いランドセルを背負って登校する姿に母さんがいちいち泣かないくらいまでになった。
明日から小学生最後の夏休みかー、と大きく伸びをしかけた時、遼が「兄ちゃーん」と遠くから手招きして俺

を呼ぶのが聞こえた。傍に寄ると段ボール箱をのぞいている。
「兄ちゃん、猫、捨てられてる。お腹すかしてそうだよね……」
箱の中の白い子猫はみゃあと小さく鳴いた。
「……よしっ、家に帰ってミルクあげようか！　それで家族の一員になれるよう交渉しようぜ！」
「……うんっ!!」
子猫を抱き上げた俺と遼の足元には、虹を映した小さな水たまりが広がっていた。